



プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

111年06月07日 11:43:38

111年06月07日 11:43:38

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

Call Slip

3892
26
43

<請求票>(控)

資料名: 支那国民性と経済精神

巻次:

著者名: 大谷孝太郎 || 著

出版者: 巖松堂書店 頁数: 339p

大きさ: 22cm 出版年: 1943

書名
資料名: 支那国民性と経済精神
巻次:
著者名: 大谷孝太郎 著
出版者: 巖松堂書店
出版年: 1943
大きさ: 22cm
頁数: 339p

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 1121285382

切り取り

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 1121285382

請求記号
3892
26
43

— 社 人 自 東 新	力	事
↓		
— 社 人 自 東 新	請求	報告
MB 1 マイコ	B1 アルファベット	原紙 縮刷
MB 2 マイコ	B2 洋	中 朝
行 多	1F 児	B1 青
	B2	1F B1 B2

り、合して一つの世界観を構成してゐるものと考へざるを得ぬ。第二、ヨーロッパ的國家にありてこそは只管勢力合理的であり、理想の如きは概ね勢力保持増進の邊幅修飾であり手段であつたともいへようが、歴史上の國家がすべてさうであつたわけではなく、實に東亞の或る國家の場合、根柢に於て勢力意欲と理想とが繋がつてゐるのみならず、表面に於ても理想が勢力保持増進の邊幅修飾乃至手段ではなくして、むしろ反對に勢力が理想實現の手段である様な理念が屹立してゐるのではあるまいか。日本國家の八紘爲宇の精神に就いては説くまでもなきこと、支那の國家理念にもそれがはつきりして居る。一例を支那前清にとるに、マカートニ卿の齎した要求に對する乾隆帝の英國王宛勅書に「天朝に産する茶・磁器・絲等は西洋各國及び汝の國の必需品であるから、憐憫の情から恩を加へ、澳門に於て洋行を開放し貿易を許し、その必要の日用品を資助し、天朝の餘澤に霑はしめてゐるのである」といひ、「天朝の德威は遠く及び、萬國衆王す」といつてゐるのは、今から見れば荒唐無稽な天下思想の表現ではあるが、當時支那としては眞面目にかう考へてゐたのである。これ、恩と徳とを以て支那國と外國とが相結ぶことを言つたものに外ならず、愛情と理想とを國家の對外態度の眞向に振り翳せるものと言はなければならぬ。

英支勾結の要因として英支相互の思想なり世界観なりは、決して英支夫々の經濟的政治軍事的

意欲の單なる邊幅修飾乃至手段としてはたらいてゐるのではなく、むしろ其の根柢的的要因であることを認めなければならない。

本章試みんとする所の英支勾結の世界観的吟味に於ては世界観の政治・經濟・社會的理念と、理想的人間型と最も一般的世間的な價值領域である政治的・社會的地位と經濟的利益に對する態度と、此の三つの方面に英支勾結の絆の存することを明かにしたいと思ふ。英支夫々の政治・經濟・社會的理念は、即ちデモクラシーと王道とである。英支夫々の理想的人間型は即ちゼントルマン或は紳士と君子とである。地位及び經濟的利益の支那的表現は面子と發財とである。

二 民族主義精神

英國民が口に自らのナショナルリズムを標榜することなきも實は民族的優越の意識強烈にして傲岸尊大であること、個々人自尊の心強く、國家亦、自主獨尊の態度を持して譲らざることは周知のところであるが、支那國民は口に民族主義を喧しく叫號すると共に、實際、民族的優越の意識強く、個々人傲岸尊大なると共に、民族的にも自主自尊の強い要求を藏してゐる。

阿片戰爭から第一次世界大戰までの八十年許りの間は支那國民が自己勢力並に文化に對して自

信を失はしめられ、自信を失つた時代であるが、他は一貫して民族的優越の意識を堅持し通してゐるといつて不可はない。右の八十年の間と雖も衷心自尊の念を喪失して卑屈になつたのではなく、優越を誇るべき内容を失つた丈である。無内容な、空虚な自尊は依然持續してゐた。大體に於て、阿片戦争までは、中華の文化を内容として文化的内容的に尊大を保ち、阿片戦争から第一次世界大戦までは空虚に尊大を持し、第一次世界大戦後は、力むれば先進列強に比肩することが出るといふ、能力に對する自信並に徐々ながら先進列強に追いついた事實——近代國家建設に向つての實績——を主内容とし、これに沿うて一度自信を失はしめられた自己固有勢力並に文化に對して、若干の自信を取戻し、其の自信を従たる内容とする、大體に於て勢力的な内容的尊大に趨つたと觀ることが出来る。かゝる變革はありながら、支那國民の尊大、民族的優越の意識の強烈なることは一貫してゐる。支那民族が自主自尊の強い要求を呈するの由つて來るところ悠遠なりといふべきである。支那國民今日の民族主義精神の旺盛なる、決して孫中山一黨の作出にかゝるものではない。

論語八佾第三に、「子曰。夷狄之有君。不如諸夏之亡也。」とあるが、これを「夷狄ノ君アルハ諸夏ノ亡キガ如クナラズ」と讀まないで、「夷狄ノ君アルハ諸夏ノ亡キニ如カザルナリ」と讀むも

のとすれば、君臣の秩序はあつても文化のない夷狄はたとひ君臣の秩序はなくとも文化の高い諸夏に及ばぬといふ意味となるが、此の解釋に依るとせば漢族の文化的優越を極度に高調したことになる。孟子滕文公句上に「吾、夏を用ツテ夷ヲ變ズル者ヲ聞ケリ。未ダ夷ニ變ゼラル、者ヲ聞カザルナリ」とあるも夏の文化的優越と同化力とを稱したもので、これ亦漢族の優越を高調したるに外ならぬ。現代支那にも孔孟の思想は死灰となつて居らない。孔孟の思想尙ほ現代に生きて居るとすれば、支那國民の民族主義精神は由つて來るところ遠く、根ざすところ深いと言はなければならぬ。

支那國民の民族主義精神は遠く深く而して旺盛なのであるから、英支勾結といつても其の勾結には嚴たる限界が存する。支那國民の眞面目は一切の侮華的なもの壓華的な外力を排除するにあり、帝國主義的である限り如何なる外國をも逐出すにあるのであるから、如何に親英に傾いたといつても大英帝國の藩屏となることを斷じて肯するものではない。支那は五卅事件以後排英に熱して遂に英國をして百八十度の轉回をなさしめ若干の租界を回收した。あれこそが支那國民の對英態度——且又對外態度——の眞諦である。前述の乾隆帝の英國王に對する勅書に盛られたる氣位と氣魄は決して消え去つて居らない。英支勾結に於て支那が自主性を堅持せんとし對等相互主

義を主張せんことは明白であり、英國の手先として利用せらるる程にあまくないことは容易に透される。

英支相互の經濟的勢力合理主義及び政治軍事的勢力合理主義が英支勾結の要因としてはたらくのは民族主義精神の限界内に於てである。王道とデモクラシー、君子と紳士、面子と發射といふ世界觀の諸方面が英支勾結の絆としてはたらくのも亦、此の限界内に於てのことである。事民族主義精神に觸れ、或は民族主義精神自ら躍動するや、勾結の絆は却つて反撥の發條となる。英支勾結には之を破綻せしむべき脈々たる底流が伏在する。

三 王道とデモクラシー

支那民族世界觀に於ける政治・經濟・社會的理念は王道であり、英國民のそれはデモクラシーであると言つて然らずと應へる人は少いであらう。支那國民の政治・經濟・社會的生活はそれ自體變遷止るなき近代國家の建設を追つかけ來つてゐる。一見固有理念たる王道の如き之を忘却し去つたかの如くであるが、民族的優越の意識の強烈にして無内容にでも自尊を持続する尊大な支那國民が、固有の而も外國思想にまさるとも劣らぬ高邁な理念を眞底から忘却するといふことが

出来る筈はないのである。時あつて意識の前面に之を引出し内外に宣揚するのが當然である。かの尊孔運動の如き單なる邊幅修飾ではなくして、爲政者自ら知るや知らずや、實に王道理念の發露である。

王道とデモクラシーとの同一ならざることは其の道の人ならずとも大凡承知の所であるが、兩者は又多分に相通するものを有つ。少くともデモクラシーに拮抗する世界の他の二大思潮たる全體主義と共產主義とよりもデモクラシーと多くの相通するものを有つ。王道世界觀の支那國民が王道自らを措いてはデモクラシー世界觀に惹かれるといふことは誠に自然なことである。王道とデモクラシーとは英支勾結の一つの絆たらざるを得ない。

大方周知の如く禮記の禮運篇に「大道ノ行ハレシヤ、天下ヲ公トナシ、賢ヲ選ビ能ニ興ミシ、信ヲ講ジ睦ヲ脩ム、故ニ、人獨リ其ノ親ヲ親トセズ、獨リ其ノ子ヲ子トセズ、老ヲシテ終ルトコロアリ、壯ヲシテ用フルトコロアリ、幼ヲシテ長ズルトコロアリ、矜寡孤獨廢疾ノ者ヲシテ皆養フトコロアラシム。男ハ分アリ。女ハ歸アリ。貨ハソノ地に棄テラル、ヲ惡メドモ必ズシモ己ニ藏メズ、力ハ其ノ身ヨリ出サバルヲ惡メドモ必ズシモ己ノ爲ニセズ。是ノ故ニ、謀ハ閉テテ興ラズ、盜竊亂賊而モ作ラズ。故ニ外戸閉テズ。是ヲ大同ト謂フ」とあり、これが王道理念の姿であ

る。文字通りでなくとも文字に盛られてゐる意味が王道理念である。デモクラシーに就いて一般に考へられてゐることは、政治的自由、言論の自由、思想の自由といふ形式的自由と經濟的自由、身體上の自由、社會上の自由、家族上の自由といふ實質的自由とを要素とすることである。就中重要なる政治的自由は即ち Government of the people, by the people, for the people でなければならずとし、經濟的自由は職業選擇の自由、住居移轉の自由、營業の自由、商業の自由、契約の自由、消費の自由等に亘る。

これだけでは王道とデモクラシーとの異同を辨すべくもないが、これだけでも最小限左の二つの點が兩者に相通することが認められる。(一)個人本位(二)強權の支配又は獨裁に對する反對。王道に於てもデモクラシーに於ても人民を重んじ個人を本位とする。個人こそ實在であつて個人が集つて社會をなし國家をなすとし、先づ全體があつて全體のために個人が存するといふ様なことは到底納得出来ない。國家の政治は個人のためのものでなければならぬと考へられてゐる。個人を尊重するのであるから、個々人の關係に於ても一人が他人の人格を壓迫し之を手段とすることがあつてはならない。人格は對等であり相互尊重せられなければならない、といふことになる。従つて、當然個人の人格を滅却し蹂躪する様な強權の支配や獨裁は許し難いものである。

惟ふに、これ等は生活上の重大問題である。王道世界觀を有つ支那民族がデモクラシー世界に惹かれ、ひいてデモクラシー世界觀を有つ英國民に惹かれるのも、蓋し當然といはなければならぬ。

然るに王道とデモクラシーとは別の重大な點に於て喰ひ違つてゐる。それは少くとも次の二點に於てである。(一)消極的個人主義と積極的個人主義(二)賢能政治と民權主義。王道もデモクラシーも共に人民を重んじ個人を本位とする。いひ換へれば民主主義個人主義であるけれども、王道の個人主義は個人が養生送死憾みなき様に、安居樂業出来る様に願ひ、保身をこれ希ふ所の消極的個人主義であり、デモクラシーの個人主義は個人をして存分にイニシアティヴを働かしめ縦横に腕を揮はしめんとする積極的個人主義である。自然、私有財産に就いての考へ方も一は上記禮運篇に見えてゐる如く消極的であるけれども、他は積極的である。次に、王道は賢能政治を認める。賢能は知に於て優れてゐるのみならず、徳に於ても優れてゐなければならない。賢能が政治に當れば敢へて民權を主張せず政治は賢能に委せることが出来る。政治を委せられた賢能は勿論強權を揮ふことは許されない。それは徳に於て優るゝ所以ではないからである。デモクラシーは Government of the people, by the people, for the people の言葉にも現れてゐる様に人民個人の權利を

叫んで譲らない。王道の政治は徳治主義であり、デモクラシーの政治は法治主義である。個人主義の消極性と積極性との間きはなほ埋め得る。現に支那の王道世界観は此の點自己修正をなし、消極より積極に轉じつゝあるものゝ如くである。所が、徳と權利、徳治と法治との罅隙は埋め難い。此の罅隙に直面するや王道世界観とデモクラシー世界観とは到底相容れず、英支反撥せんと必走である。

今や、世界は日本及び全體主義の獨・伊とデモクラシーの英・米と共產主義の蘇聯との三大陣營に分れて多角戦を戦つてゐると観ることが出来る。重慶側支那はデモクラシー陣營に列なつてゐる。重慶側支那がデモクラシー陣營に列なつてゐる事實を認めて英・米と支那との夫々の勢力合理性に發する苟合に過ぎないと軽く觀るべきではあるまい。だからといつて、此の事實を認めてA・B・C夫々の勢力合理性に加ふるに、デモクラシー世界観の傘下に相寄る不拔の勾結なりと重く見るべきでもない。勢力合理性を一要因とし、デモクラシー世界観と相通するものある王道世界観を一つの絆として支那はデモクラシー陣營に連なつてゐるのである。而して、勢力合理性は明白に可變的であるが、王道世界観も亦英支勾結の一つの絆として可變的である。蓋し、支那の政治・經濟・社會理念はデモクラシーではなくして飽くまで王道である。王道がデモクラシ

イと相通する限りに於てのみ、支那民族はデモクラシーに惹かれ、王道とデモクラシーと兩つの世界観が英支勾結の一つの絆としてはたらく。一定の條件成立に依り、英支が王道とデモクラシーとの罅隙に直面し、之を震撼せしめる様な事態となるや、王道とデモクラシーとは英支勾結の絆たることをやめて、却つて英支反撥の發條となる運命にある。一旦勢力合理性に動搖を來たし、王道とデモクラシーとも亦英支勾結の絆たることをやめんか、英支の勾結はたわいなく解け去り、支那はデモクラシー陣營を離れ行くであらう。

四 君子と紳士

支那人の理想的人間型は君子であり、英國人の理想的人間型はゼントルマン或は紳士である。昔の支那人は君子を謳歌し君子たらんことを念願して日もこれ足らなかつたかも知れないが、今の支那人は然らず、君子たらうともしなければ君子たり得てゐるものもない、といふ人があるかも知れぬ。それは大なる謬りである。支那に於てなにがしか衆人を率ゐてゐる様な人をよく観察して見るがよい。必ずや其の人は古典の謳歌し古人の讚嘆した君子と相通する要素を豊かに備へてゐるか又は極めて上手に見せかけてゐることを發見するであらう。又若し、古典の謳歌し

古人の讚嘆した様な君子人——又は極めて巧みな擬裝君子人——が現に現代支那人の前に出現したらしたら、現代支那人は其の人に惹きつけられ其の人を欽仰の中心とするに違ひない。君子といふ理想の人間型は今尙躡躑として現代支那人の中に生きてゐる。英國人の理想の人間型たる紳士に就いて、人或は英國人は口を開けば紳士々々といふと雖もすべて彼等は似而非紳士である。とて、英國人の所謂ゼントルマンシップを否認するに熱心である。成程、現實の所謂英國紳士は眞個の紳士ではなくして紳士の邊幅丈を身につけた似而非紳士であるかも知れない。けれども、英國人がゼントルマンたらんことを、眞個の紳士たらんことを心懸けてゐることは否定出来ない。實際は邊幅を身につけただけであつたり、擬裝紳士であつたりする方が多いにしても、念願だけは眞個の紳士にある。現實英國人の多くが似而非紳士であるといふ事實は英國人の中に理想の人間型としての紳士が生きてゐないといふ論據とはならない。

君子と紳士との同一ならざることは三歳の童子でも心得てゐるが、兩者は又多分に相通するものを有つ。君子を英譯して「ゼントルマン」と表現してゐるのに出會ふとなにかしらくすぐつたものを覺えるが、それは此の異を同の中に封じ込む所から來る様に思ふ。たとひ多くは邊幅に於てにせよ、君子と紳士とは多くの相通するものを有つ。君子を理想としこれに惹かれる支那

人が君子自らを措いては紳士に惹かれるといふことは誠に自然なことである。君子と紳士とも亦英支勾結の一つの絆たるを失はない。

抑々、理想の人間型を君子といひ紳士といつて掲げ仰ぐ事に於て先づ英支人相通する。今の日本人も「偉人」「大人物」或は「武士」「人格者」「出來た人」といふ理想の人間型を掲げてはゐる。然し、これ等の日本人の理想の人間型は君子の如く構造がはつきりしてゐず、紳士の如く鼻先に始中ブラ下つてはゐない。偉人、大人物、人格者「振る」ことは擯斥せられる。往々「人格者」といふ時に理想の人間型的として讚仰するとは反對の揶揄的ニュアンスを含むことがある。畢竟、日本人にあつて理想の人間型は掲げられてゐないではないが、君子や紳士の如くはつきりした姿をして居らない。又、別に、英國人をジョン・ブル、支那人をジョン・チャイナマンと呼ぶと共に米國人をアンクル・サムと呼ぶ。米國人にも亦人間型が浮き出してゐる様に思はれる。然し、ジョン・ブルといひ、ジョン・チャイナマンといひ、アンクル・サムといふ時の人間型は英・支・米人の經驗的な性格特徴を一方的に昂揚して客觀的に構成した理念型的人間であつて、經驗的客觀的な形象である。それだけにユウモアを含む。君子と紳士とは支那人なり英國人なりが主觀的に自身の理想として描き出した理想的主觀的な形象である。米國人のアンクル・サムを

英國人の紳士や支那人の君子と對應せしめることは不可である。

支那人の理想的人間型たる君子の精神構造は支那古典が諄々として説き盡してゐる。古典を温めれば親しく君子に接することが出来る。茲に敢て分析描寫することを要しないであらう。英國人の理想的人間型たる紳士の精神構造も今茲に筆者が分析することを要しないであらう。

君子と紳士とは本質的なもの邊幅的なものを通じて少くとも次の三つの點に於て相通するではなからうか。(一)人格尊重、(二)信義、(三)禮儀作法。君子も紳士も共に奴隸的屈從を最も嫌ふ。地上の如何なる力の前にも屈することを辱しとしない。人格の要求強く、常に相手が己の人格を認め尊重せんことを欲する。自ら又、相手の自尊を傷つけざらむとし、相手の人格の要求を容れ、常に相手の人格を認め尊重する。歸するところ、人格の相互尊重、人格的對等を旨とする。自らが、人格を認められ、相應の地位を與へられ、或る程度の自由を與へられ、其の自由領域に就いて信認せられ、事を委せられんことを要求すると共に、相手に對し、人格を認め、相應の地位を與へ、或る程度の自由を與へ、其の自由領域に就いて彼を信認し、事を委せるのが君子と紳士との共に持する對人態度である。従つて君子紳士共に信認を要求すると共に信認を裏切らざる様自ら信義を守り、信認を與へると共に信認に値ひする様相手に信義を要求する。即ち、信認を

保ち信義を重んずる。然諾を重んじ約束に違はぬことが君子たり紳士たるの重大要件である。英國紳士が如何に格式を重んじ禮儀作法を心得、態度に氣をつけるかは人の知る所。支那今日の君子は「禮儀三千威儀三百」の面影なきが如くにして實は態度風格を重んずるの甚しきものあり、家族交友の間禮法嚴なるものがある。かの新生活運動なるものは一面に於て君子的禮法の頌歌である。

世界觀に於ける理想的人間型といふものは生活上極めて重要なものである。何人と雖も理想的人間型を胸に描いて、及ばずとも庶幾からんと欽慕せざるはなかるべく、極悪人と雖も彼の理想的人間型には頭を下げるであらう。況んや理想的人間型をはつきり掲げる支那人や英國人であつてみれば、眞實其の理想的人間型に近づかうとの努力さへしないかも知れないが、それにして之に強く惹かれられないわけに行かないであらう。君子を理想的人間型として掲げ欽仰する支那人が紳士に惹かれ、ひいて紳士を標榜する英國人に惹かれるのは當然のことといはなければならぬ。

然るに、君子と紳士とは別の重大な點に於て喰ひ違つてゐる。それは少くとも左の三點に於てである。(一)全體的人格と實用的人間、(二)家族主義と個人主義、(三)徳と力。「君子不器」と

ある様に君子は専門家であつてはならず實用を辨ずる材幹を要しない。即ち萬能の全體的人格でなければならぬ。之に對して紳士は専門家であつてよく、技術家であつてよく、コンモン・センスに長じた實用的人間なるを可とする。全體的人間であることを要しない。次に、「孝弟也者。其爲仁之本與」ともある様に孝弟といふ家族道德が君子の根本的な要素であるが、紳士は家族に縛られることがない。善良優秀なる「市民」たることを以て要素とする。最後に、君子は徳を必須の要素とする。君子と君子ならざる者とを分つけ、ちめは一に徳である。道德的行爲、徳性、更に人徳である。財力、權勢、名譽、門閥といった力は徳に附隨してゐても不可はなく、自ら隨伴するのが當然であるが、かゝる力は君子の本質的要素ではない。然るに、紳士は Character の人でなければならないが、それよりもむしろ財力、權勢、名譽、門閥といった力を必須の要件とする。「一簞食、一瓢飲、在陋巷」といふ紳士も「飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。」といふ貧樂家の紳士といふものも凡そあり得ない。君子は襤褸を厭はざるも紳士は瀟洒たる服装をしてゐなければならない。君子は村夫子と隣りして居り、紳士は貴族富豪と卓を共にしてゐる。君子と紳士とは徳と力とに隔たつてゐる。現在の支那人に於ける傾向としては全體的人格と實用的人間との開きは埋まりつゝある様である。支那人の世界観は自己修正をなし、其の

理想的人間型に實用を辨ずる材幹を加へ、専門家、技術家たるも不可なしといふ様に變りつゝあるものの如くである。然しながら、家族主義と個人主義、徳と力の罅隙は埋まりさうにもない。此の罅隙に直面するや君子と紳士とは袂を分つ。支那人が孝弟を高調するに英國人が眞向から之をなみする時、支那人が人徳を稱へるに英國人が力を以て押す場合、英支反撥せんこと必定である。

支那人の理想的人間型は紳士ではなくして飽くまで君子である。君子が紳士と相通する限りに於てのみ支那人は紳士に惹かれ、君子と紳士と兩つの理想的人間型が英支勾結の一つの絆としてはたらく。一定の條件の成立に依り、英支人が君子と紳士との罅隙に突きあたる様な事態となるや、君子と紳士とは英支勾結の絆たることをやめて却つて英支反撥の發條となる運命にある。

五 面子と發財

支那人は最も一般的世間的な價值領域である政治的社會的地位に對して面子といふ獨特の領域を形成して居り、同じく重要なる價值領域たる經濟的利益又は財利に對して發財といふ表現を興へてゐる。

面子は日本でいふ體面、面目と實祿との複合の様なものである。人格が認められ相應の地位が興へられ其の地位が道理を離れてものを言ふことである。面子は決して空名と同一視せらるべきものではない。支那人の世界観に於て面子と發財とは兩つながら大切なものである。支那人の生活は面子と發財との矛盾に陥り、喜劇的な矛盾を露呈することがある。事實、面子と發財と兩つながら支那人は之を併せ欲する。陞官發財とは面子と發財兩つながら併せ獲ることである。面子發財兩つながら併せて欲しいことには支那人も變りはない。

然るに、支那人世界観に於ける面子と發財とに對しては異様な理解が存する。其の一は、面子は空名である、何等實權も實利も伴はずとも空虚な名目支で支那人の面子の欲求は充足されるといふ理解である。其の二は、さういふ風に空名と理解された面子が支那人にとり最高の價值領域であるから、空虚でも名目さへ供すれば則ち支那人を惹きつけることが出来るといふ理解である。其の三は、面子を以て空名とは解せず、人格が認められ、相應の地位が興へられ、或る程度の自由が興へられ、其の自由領域に就いては信認せられ事を委され實祿を尊重されることであると解して、面子が實力實權を含んだものであることを認めつゝ、これこそが支那人の最高の價值領域であつて發財は彼にとつてどうでもよいといふ理解である。其の四は、支那人最高の價值は發財で

ある。喰はずに利を以てすれば則ち跟いて來る、人格も地位も信認も實權も況んや空名も支那人を惹きつけ得ないといふ理解である。就中、其の一と二と四との理解が多く行はれてゐる様に見受けられるが、何れも由々しき誤謬である。支那人精神の喜劇的矛盾構造に操られて謬見が第一、第二、第三と第四とに矛盾對立して同時に行はれるに至つては烏譚がましき限りである。支那人は喜劇的矛盾を露呈するけれども全體の人間たらんとしてやまず、面子支で可なりとはしない。況んや空名に満足しない。發財支でも可なりとしない。面子と發財と兩つながら支那人は欲する。兩つが相並んで支那人の重要なる價值領域をなしてゐる。従つて、此の兩つを併せ供するものに惹かれる。

英國人の世界観に於ても政治的社會的地位と經濟的利益とは並び聳えてゐる。英國人が如何に地位と財利とを併せ貪るかは説くまでもないことであらう。地位さへ獲れば財利は問はずといふ考へ方も、財利さへ獲れば地位は問はずといふ考へ方も英國人には奇異である。況んや空名の如きは彼にとりて無價值である。英國人の世界観に於ては地位と財利とがガツテリと複合領域をなしてゐる。

かゝる英國人が支那人に對するや、支那人世界観に於ける面子と發財との理解は正鵠を失はな

い。支那人が面子と發財兩つながら併せ欲することを理解するが故に、兩つを併せ供して以て支那人を惹きつけることが出来る。

英國人は其の人格的相互尊重の世界觀に基づいて、對人關係に於て、自ら尊び、相應の地位を要求し、信認を求めると共に相手に相應の地位を供し、相手を信認し事を委せようとし、此の相互關係の間で give and take の原則に即り、お互に儲けようとする。少くとも形式的には相互的に經濟的利益を収めようとする。依つて、英國人が支那人に對するや、故らに支那人を惹きつけようと考えて、面子と發財とを併せ供しようとも、おのづから此の二つを併せ供することとなる。例へば、英支人の合辦事業に於て英國人は支配的地位を自らに留保すると共に、支那人にも相應の地位を與へることを忘れない。其の與へる地位は決して空位ではない。なにがしかの自由領域を有つ實權ある地位である。去りし日の香港の事であるが、香港の支那人實業家は英國籍を有するにしても買辦上りの在港華僑に外ならないに拘らず、何東 (Sir Robert Ho Tung) 周壽臣 (Hon. Sir Shou Son Chou)、旭餅行 (R. H. Katwell & Co.)、羅文錦 (Hon. Lo Mankam) の如きは英國人實業家と公私共密接な關係を保ち、同等の社會的地位を享受し、勳爵士の如き稱號をさへ授けられてゐる。英國人は支那人との取引に於て常に自らも儲け支那人にも儲けさす

ことを忘れない。包辦といはれるものは一種の請負であるが、請負人に自由數量の餘地あり擧利のゆとりある制度にして支那人の喜ぶ所であるが、英國人は好んで支那人に包辦をなさしめる。

かうした遣り方で英國人は支那人に面子と發財とを併せ供し來つた。支那人はおのづと英國人に惹かれざるを得ない。面子と發財、即ち地位と經濟的利益に對する英支人の態度も亦英支勾結の一つの絆たるを失はない。

然し、面子は政治的勢力意欲に關係するものであり、發財は經濟的勢力意欲に外ならぬ。面子と發財とに對する英國人の態度は一面に於ては支那人を英國人に惹きつけ英支勾結の世界觀的な一つの絆なり得ても、究局は英支相互の政治的及び經濟的勢力意欲の關係に歸し、英支人相互の勢力意欲の合致として英支勾結の勢力的な要因をなす。従つて、勢力合理的なる勾結につきもの反撥の契機を含まざるを得ぬ。嘗つて支那人が反英帝國主義に狂奔したのも何等不思議ではない。

六 英支勾結の破權

英支の勾結は三つの紐帶に基く。其の一は英支相互の經濟的勢力意欲の合致である。其の二は

英支相互の政治軍事的勢力意欲の合致である。其の三は英支兩國國民の世界観の共通である。第一第二の紐帶は目的合理的であるが、第三の紐帶は理想的且非合理的感情的である。第一第二は利不利の打算に發し、第三は愛憎好惡の心境に發する。勢力意欲の合致は歴然として眼に見える鞏固な紐帶であるが、目的合理的打算に發するが故に不安定である。いはゞ、堅いけれども脆い紐帶である。特に現下英支勾結の強化を招來してゐる政治的軍事的意欲は殊更堅く且脆い。然るに、世界観の共通は理想や感情といふ掴み難いものごと故、眼に見えぬ綾羅の如き紐帶であるが、人生の根柢的なるものなるが故に強靱である。いはゞ、柔いがねばり強い紐帶である。

かかる紐帶に基づいて出來上つてゐる英支勾結は果して容易に抜くべからざるものなりや、不拔に非ずとせば、如何なる手段に依り又は如何なる條件の成立に依りて抜き得るものなりや、解きほぐし得るものなりや、といふに、軍事政治經濟的勢力を以て直接強引に之を解きほぐす方途も存するが、此の方途を以ては勢力的紐帶が解きほぐし得るに止る。手緩くともより根本的、全面的な方途は支那國民自體の政治的、軍事的、經濟的勢力の増大と民族主義精神の昂揚とに存する。

英支相互の勢力合理主義が英支勾結の要因として働くのが、民族主義精神の限界内に於てのこ

とであることは前述したる所であるが、更に、支那の政治的、軍事的、經濟的勢力増大し、支那民族主義精神が昂揚せば、支那の對英依存の必要程度は減退し、自ら對英態度に於て支那の自主性増大し、従つて、勢力意欲は英支勾結の紐帶として更に不安定な極度に脆い紐帶と化するであらう。

支那民族主義精神が昂揚せば、必ずや支那民族の世界観が其の具體性を以て、換言すれば、内容を具有して、全面的に前面に現れ來り、其の結果、英國國民の世界観との異同が大寫しとなつて出て來る。儒教思想が「復活」する。さうなると、王道とデモクラシイとの間に於ける賢能政治と民権主義との罅隙、君子と紳士との間に於ける家族主義と個人主義との罅隙、徳と力との罅隙等がマザ／＼と露出することとなり、果然、王道とデモクラシイも、君子と紳士も英支勾結の絆たることをやめて却つて英支反撥の發條となる。柔くねばり強い紐帶なりし英支世界観は英支勾結の紐帶どころか英支絶縁體と化するであらう。

大東亞新秩序建設のためには英支の勾結を解き離し、A・B・C・D戰線を破摧し盡さなければならぬ。假に英支勾結を破摧すべく力を以て直接強引に之を解きほぐす方途を取るに止らず、其の傍ら、手緩くとも根本的、全面的な方途に出づるものとせば、大東亞新秩序建設の途上に於

て、支那民族自體の政治的、軍事的、經濟的勢力の増大と民族主義精神の昂揚とを進め行かなければならない。これは一見パラドクシカルに見える。けれども、實は大東亞新秩序の理念の中に含まれてゐる。蓋し、大東亞新秩序に於て支那自體の勢力増大、民族主義精神の昂揚は抑壓せられるに非ずして、發展的に收束せられるといふのが大東亞新秩序の理念だからである。

後編 支那人經濟生活及び經濟精神

第一章 「君子經濟」概念

一 君子の經濟生活の宣揚

新東亞の建設が政治と經濟と文化との三つの面を有するといふことは、三歳の童子でもと言つてよい程、一般に心得られてゐることであるが、就中文化建設はとかく政治並に經濟建設のための手段としてか又は修飾としての地位しか與へられず、政治並に經濟に對して從屬的なものに考へられ勝ちであるが、さうであつてはならない筈である。抑々、文化といはれてゐるものは人生世界の價値領域として政治や經濟と同等の重要さのものであり、寧ろより高い價値領域である。又、政治建設、經濟建設だけでは假にそれが立派に出來上つても、文化建設が之に伴つてゐなければ、人の心を捉へることが出來ない爲に、永續し難く、文化建設を伴ふことによつてはじめて

第五章 支那人企業自存力の精神的根柢	三〇
一 新東亞配給機構の建設と支那人企業の自存力	三〇
二 支那人企業の形態	三四
三 支那人企業と同業團體	三〇
四 支那人企業に於ける因縁縁用	三三
五 支那人の低生活	三四
六 勤勉及び安分	三五
七 信義と共存	三六
索引	三三三

目次・畢

支那國民性と經濟精神

緒論 支那國民性の實體性

一 總 說

時代的に悠久なる支那である。地域的に歴大なる支那である。底知れぬ種相を経験し包蔵する支那である。此の支那に就いて一口に斯様々と云々することは蛇に怖ぢぬ盲者の膽力なくて出来ることではない。言ひ攀へれば、支那を知らずして支那を語る勇者にしてはじめて出来ることである。支那は其の時間的空間的廣袤と内的多様性との故を以て、時に全歐洲に比擬せられるが、げに支那に就いて支那國民といふ一個の歴史的社會的實在を思念せんことの難きは、全歐洲に就いて歐洲國民といふが如きを思念せんことの難きに異らぬ。これは達識者の百も承知の所である。

其れに拘らず、支那に支那國民といふ一個の歴史的社會的實在を觀、支那の一切の歴史的社會的事象を擧げて支那國民を基體とする一團の事象と見做してはいけないといふいはれは存しない。吾々は今、故らに眼をつむつて、思切つて大膽に、廣袤多様な支那に支那國民といふ一個の歴史的社會的實在を觀、支那の一切の歴史的社會的事象を擧げて支那國民を基體とする一團の事象と見做さう。然る時、其の一團をなす個々の事象を凝視するに、其れが相互に影響し合ひ、作用し合つて、次から次に及び、遂に此の一團が一つの有機的なる全體を成し、全體が切り離し難き有機的聯關を保つてゐることが見出される。これは支那國民を基體とする事象の全體性といふべきであらう。次に、支那國民を基體とする一團の事象は、一つく、直接に又は窮極的に、基體たる支那國民が原因又は動機を自身の中に藏して作出せる所と理解せられる。換言すれば、支那國民が自己決定的、自主的なる基體であつて、其の自己決定的、自主的な能きとして一團の事象の一つくが理解せられる。これ、基體たる支那國民に自我又は主觀が認めらるゝことに外ならず、此の自我の作用性は自我性といふべきであらう。即ち、支那國民と支那國民を基體とする一切の歴史的社會的事象とには全體性と自我性とが認められる。此の全體性と自我性とは歸するところ自我に依る統一性である。

翻つて、個人と其の行爲又は生活とに上述と同じ全體性と自我性と、要するに、自我に依る統一性の認められるところから、吾々は個人に考へられる精神作用の統一的法則性の總體に對して性格といふ一種の實體概念を打ち樹てゐる。支那國民と支那國民を基體とする一團の事象とに全體性と自我性と、要するに、自我に依る統一性の認めらるゝ以上、支那國民に精神作用の統一的法則性を考へることが出來、而して其の總體に對して性格といふ實體概念を打ち樹てることが出来る。これは支那國民なる一つの國民の性格なるが故に、支那國民性といふことが出来る。精神科學的心理學に於て個人の性格を精神構造といふことあるに應じて、支那國民性は之を支那國民精神構造といふことが出来る。

個人性格又は個人精神構造が其の個人の自我又は主觀に對して妥當的と考へられる法則性の總體といふ意味で一つの實體であり、彼の行爲又は生活を統一的に理解せんがために豫想すべき必須の概念たるが如く、支那國民性又は支那國民精神構造は支那國民に認めらるべき自我又は主觀に對して妥當的と考へられる法則性の總體といふ意味で、一つの實體であり、支那國民を基體とする歴史的社會的事象を統一的に理解せんがために豫想すべき必須の概念である。それは物質的實體では勿論なく、ものそれ自體といつた様な實體でもない。而して、支那國民事象を統一的に

理解せんとする上に於て存するものと考へなくては濟まされぬといふ意味で必須の概念である。

支那國民性は支那國民に考へられる精神作用の統一的法則性である。支那國民を一個の精神的實在と觀ての其の生活の旋律である。いはゞ、支那の「國振り」である。たゞ其れらの斷片ではなくして總體である。

世に、支那國民性と稱して支那國民を代表し、支那人の典型である様な個人の性格を意味することが極めて多い。こは概念として右の支那國民性とは峻別せらるべきものであつて、混同を許されない。たゞ、兩者全く異なる概念ではありながら、さうした支那人個人の性格は——極めて不十分ながら——支那國民性の縮圖である。

支那國民性は支那國民事象を統一的に理解せんとする上に於ける必須の實體概念である。然しながら、之を當面の對象として之が全貌を精緻な姿に於て捉へんとするに、其れは餘りに宏壯複雑にして吾々個人の知力を超越する。支那國民性の學はなかくに企てらるべきものではない。たゞ支那國民性の實體性を念頭に置いてする支那國民事象の理解は必須且可能である。さうした支那國民事象の理解即ち國民性的支那研究には種々なる行き方が存するであらう。支那國民性の學も國民性的支那研究も支那國民事象を支那國民の精神作用として取扱ひ、之を理解せんとする

ものである。支那研究としては精神科學的なるもの、いはゞ精神科學的支那研究である。

二 支那國民事象の全體性

上に、筆者は、支那國民を基體とする一切の歴史的社會的事象に全體性が認められると謂つたが、支那國民事象に果して如何様にさうした全體性が認められるであらうか。支那國民事象の一を凝視する時、おのづから其の全體性が見えて來る。

時代的に悠久、地域的に廣大にして、底知れぬ種相を經驗し包藏する支那のことである。其の國民事象は時代と共に著しき變革を閲し、地域的に驚くべき相違を帶び、社會集團的に甚しき懸隔を呈してゐる。而して、其れは、經濟、政治、法律、風俗、言語、藝術、道德、哲學、科學、宗教等の諸々の所謂文化的因素に分化してゐる。立入つて觀れば、個々の支那國民事象は嚴に一回的個別的なものである。又、個々人を取つて見ても、支那人の一人々々が個性を有してゐる。それに拘らず、之が凝視や、久しうし因果的歸屬を索め行けば、支那の一時代と他時代とは不可分に連絡し、一地域と他地域とは切り離し難く、一集團と他集團とは互にかゝり存してゐるし、各文化的因素は夫々の内部に於て各々たとへば支那經濟、支那政治、支那法といふ全體を成せる

のみならず、相互の間、支那經濟は支那政治、支那法と、支那法は支那道德、支那宗教と、等といふ様に、互に決定し合ひ、影響し合ひ、作用し合つて、究竟、所謂 *consensus social* を呈してゐる。結局、支那國民を基體とする一切の個々の事象は相互に影響し合ひ、作用し合つて、次から次に及び、遂に一つの有機的なる全體をなし、全體が切り離し難き有機的聯關を保つてゐることが見出される。江浙豊かに穫れば天下飢えず、とは正しく此の消息を經濟の領域に於て如實に物語れるものである。

一二の支那國民事象を取つて之を凝視し、之が因果的歸屬を索め行かむに、右の全體性は歴然として浮び出て來るであらう。一と他との間に一應は一方的決定作用が認められるが、やがて、相互決定關係が見えて來る。而して、此の相互決定關係が波及して遂に全支那國民事象に亘り、支那國民事象全體が切り離し難き有機的聯關を保つてゐて、何れの一つの支那國民事象も抜き差しならぬことが見出される。

支那人の無感動な性格、又は無感動合理主義 (*nüchternen Rationalismus*) とか無感動的歡喜 (*apathische Ekstase*) と謂はれてゐるものを取つて觀よう¹⁾。支那人の無感動な性格は支那國民の或る意味で無政府的な政治の結果であると認められる。これは一應の因果的歸屬として肯定せられる。

けれども、同時に支那の無政府的な政治自體が逆に支那人の無感動な性格の結果であるとの説明が成立する。又、支那人の無感動は儒家思想の無感動合理主義から出て來てゐるし、逆に儒家思想の無感動合理主義が支那人の無感動な性格から出て來てゐる。支那人の無感動的歡喜は道家思想の無感動的歡喜に由來してゐるし、逆に道家思想の無感動的歡喜が支那人の無感動的歡喜に根ざしてゐる。畢竟、支那人の無感動な性格の因果的歸屬を索め行きて到達するのは之と支那國民の無政府的政治や儒家思想や道家思想との間の相互決定關係である。世に支那人の個人主義、利己主義と謂はれてゐるものと無政府的な政治との間も同様であらう。

1) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I, *die Wirtschaftsethik der Weltreligionen*, I. *Konfuzianismus und Taoismus*, S. 450, 490, 519.

支那國民の社會團體の中に於て團結の最も鞏固なる村落、家族、支那ギルドと呼ばれる會館、公所、幫と支那國民の國家的組織との間にも亦右と同様なる相互決定關係が認められる。支那ギルドを取つて觀よう。

秦が六國を滅し封建制度を廢して郡縣制度と爲し、統一的國家形成の端緒を開き、五代に及んで名族が滅び皇帝の權力増進著しく君主專制を馴致するに至り、宋の太祖の中央集權を経て、其

の後益々君主專制に傾き、明に及んで、遂に君主專制が完成され、清朝も亦大體明の制度を襲つたのであつたが、專制政府は氏族制度に代つて生民を充分に保護することが出来なかつた。けれども、何分家族制度の勢力強く、一家一族の規矩たる道徳は國法よりも尊重せられ、擬制的族長たる君主は該道徳に反する國法を施行し難く、支那の法律は徒法空文に終り易く、法律の保護といふことも自然薄らがるを得なかつた。加ふるに、天子に眞に天命を知るものは鮮く、多くは自己一族と政府との費用を人民から取り立て、殆んど他を顧みなかつた。君主專制といふものの、地方の事は地方官に一任するを免れず、地方官吏は人民と反對の地位に立つて、人民の利害体感など深く念頭に留めなかつた。殊に、隋の文帝が本籍回避といふ制度を設けてから、地方官に地方の利害を顧みる者も少く、任期中に赴任の費用を辨償し、他日の立身を圖るにのみ急で、公務を殆んど屬官に一任し、屬官も上役の無知に乗じて人民の膏血を搾取するに勉めた。それで、支那人は國家の保護に依頼することが出来ず、各自の生命財産を保護するため、適當なる方法を講ぜなければならなくなつた。即ち、ギルドを組織する必要が生じた。⁸⁹⁾

2) 根岸借著「支那ギルドの研究」十一—十四。

かくの如く、支那ギルドは其の發生原因を支那の國家的組織に求めることが出来る。これは誠に

肯綮に値ひする支那ギルドの説明である。然しながら、支那の國家的組織の不統一の重大なる原因の少くとも一つは逆に支那ギルドに求めることが出来るのではあるまいか。就中、「集成ギルド」が市政に參與して、都城の公共營造物の修繕新築、貧民救濟事業等を管理し、消防隊、夜警を組織し、進みて、市内警察の全權を握り、遂に市民に對し徵稅權を行ふに至り、内治外交に干渉して、外國の利權獲得に反對し、利權回收の運動を起し、外交問題を討議し、其の決議の實行を政府に迫り、内政に就いても亦其の地方の總督巡撫や各部の尙書を手古摺らした、といふが如き。其の政治活動は支那の國家的組織をどんなにか動搖せしめたことであらう。⁹⁰⁾

3) 根岸博士著前掲書三〇九—三三〇。

支那大衆の貧乏を取つて觀よう。

支那大衆は貧乏の故に、迂回生産をなし以て生産力を増大して生産物數量をより多く自然から獲得すべき生産器具を「機械」にまで高めることなくして之を「道具」の程度に止めてゐる。又、畜力に代ふるに人間勞働力を以てする。此の人間勞働本位の生産は勢ひ出来る才多數の、出来る才熟練せる勞働を必要とする。其の結果が「多子主義」と大なる人口とである。⁹¹⁾而して、「多子主義」と大なる人口の故に又貧乏となる。逆に、貧乏が「多子主義」と大なる人口との原因の一

つをなして居り、「多子主義」と大なる人口とが労働本位の生産の一原因をなして居り、労働本位の生産の故に生産力大ならずして支那大衆は貧乏を餘儀なくされて居る。結局、「多子主義」、大なる人口→貧乏→労働本位の生産→「多子主義」、大なる人口』、並に、「多子主義」、大なる人口→労働本位の生産→貧乏→「多子主義」、大なる人口』といふ反對に廻轉する因果の輪が支那大衆の貧乏を繞つて廻轉してゐる。

4) James W. Bashford, *China an Interpretation*, p. 38-39.

Richard Wilhelm, *Chinesische Wirtschaftspsychologie*, S. 10-11.

以上はほんの二、三の支那國民事象を取上げて其の因果的歸屬を索め見たるに過ぎないが、何れの歴史的社會的事象を取つて見ても同様に他との間に相互決定關係が認められるであらう。

一つの原因には更に之を結果とする原因が別にあるであらう。一つの結果には更に之を原因とする結果が別にあるであらう。原因は更に遡り結果は更に下るであらう。即ち、一筋の因果の絲は前後に延び、次から次へ延びて行つて、どこまでも走るであらう。次に、一つの結果に對するものはたゞ一つの原因でなく、一つの原因から出て來てゐるものはたゞ一つの結果ではない。換言すれば、一つの結果に對して同時に二つ以上の原因が求められるし、一つの原因から同時に二

つ以上の結果が出て來てゐる。因果の絲はたゞ一筋ではない。枝が出、更にそれが延びてゐる。例へば、支那大衆の貧乏の原因には別に階級的收取關係が興つてゐるであらうし、「多子主義」、大なる人口には別に祖先崇拝といふ宗教的信仰が興つてゐるであらう。國家的組織からはギルドのみならず尙數多のものが出来て來てゐる。

かくて、若し、絶大な根氣を以て因果の絲を辿つて行つたら、因果の絲が或は交はり或は離れ或は接し或は並んで、縦横無盡に走り廻り、以て緊密なる網をなして支那國民生活全體を蔽つてゐることの發見に到達するであらう。即ち個々の事象の相互決定作用が波及して遂に支那國民事象全體に互り、全體が切り離し難き有機的聯關を保つてゐて、何れの一つの支那國民事象も抜き差しならぬことが見出される。ここに、支那國民事象の全體性がありくと見えて居る。

個々の支那國民事象の相互決定作用が波及して支那國民事象全體に互れることが見出されるのであるが、それと共に、それが支那國民を逸脱して支那國民以外の歴史的社會的事象にも波及してゐないではない。因果の絲は支那國民の内を縦横無盡に走り廻つた上に、其の外にまで走り出でてゐることを認めざるを得ない。支那の或る地域は他國の或る地域と切り離し難く、支那國民の或る時代は他國民の或る時代と不可分に連絡し、支那の或る社會集團は他國の或る社會集團と

相かゝり存立してゐる。或る支那人は或る他國人と相互依存してゐる。支那經濟、支那政治、支那宗教等は夫々他國の經濟、政治、宗教等と相互に決定し合ひ、影響し合ひ、作用し合つてゐる。特に、支那經濟は世界經濟から孤立しては居らない。此の事を惟ふ時、個々の支那國民事象の相互作用が支那國民事象全體に互れる姿、因果の網が支那國民事象全體を蔽へる有様に、支那國民事象の全體性を認めることは如何かと思はれて來る。

然しながら、相互決定作用の度合といふことを考へねばならぬ。因果の網の密度の懸隔を認めねばならぬ。相互決定作用が支那國民全體の内に行き互れる度合と支那國民以外に波及せる度合とは格段の相違がある。因果の線は個々の支那國民事象の間を縦横無盡に走り廻つて緊密なる網をなして支那國民を蔽へども、疎らにのみ其の外に走り出でて他國民の網に参加してゐる。疎密の差に歴然たるものがある。相互作用の特に密接なる範圍を捉へて、そこに一つの全體——相對的機能的統一——を認むべきことは夙にジユメルの吾々に示せる所ではないか。依然、支那國民事象に全體性を認めざるを得ぬ。

三 支那國民の自我性

上に、筆者は、支那國民事象の基體たる支那國民に自我又は主觀が認められ、此の自我の作用、性即ち自我性が認められると謂つた。廣袤多様なる支那國民に果して如何様にさうした自我性が認められるであらうか。支那國民事象の凝視を更に續け行く時、おのづから其の自我性は吾々の眼に映じ來る。

第一 支那國民生活が支那の國土に接する所、支那國民が他國と勢力的關係に立入れる所、並びに、支那國民が外來文化を受容する仕方に、要するに、「外」からの刺戟に對して支那國民が呈する反應に支那國民事象の自律性が認められる。「外」からの刺戟に對する反應に於て、個々の支那國民事象は他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつゝ、又其れ自身の自己決定的な動きをなすことが認められる。個々の支那國民事象を部分とする全體たる支那國民事象も亦從つて自己決定的な動きをなすものと認められる。此の支那國民事象の自律性に對して妥當な説明を求めれば、之が基體たる支那國民に自我性を認めざるを得ぬ。言ひ換へれば、支那國民に自己決定的、自主的な動き即ち自我性を認めることに依つてはじめて此の支那國民事象の自律性が妥當的に理解せられる。

一 支那國民生活が支那の國土に接する所に支那國民事象の自律性が現れてゐる。

個々の支那國民事象をちつと凝視して之が因果的歸屬を追求し行かむに、往々、といふよりも寧ろ大抵、支那の國土或は自然環境に到達する。言ひ換へれば、支那國民生活は支那の國土に接してゐる。此の支那國民生活と支那の國土との接面に於て、國土は直接之に接する支那國民事象にとりて「外」なるもの、其れに先んずるものとして、之に一方的にのみ影響を與へる。國民事象が折返し國土に對して影響を及ぼせることなきにあらねど、そは微々取るに足らぬものである。國土と直接之に接する國民事象との間、國土より國民事象に對する一方的作用のみが認められ、此の國民事象は國土に依りて説明せられる。然しながら、國土を以て之を説明し盡すことは出来ない。直接國土に接する國民事象は國土の影響の下に立ち其の一方的決定を受けながらも、なほ國土によりて決定せられざる或る幅の動きを、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつつ、自己決定的になしてゐる。即ち直接國土に接する支那國民事象は或る程度の自律性を具有發揮する。同一又は類似の國土が支那國民と他國民とに共通に與へられてゐる場合、其の國土、從つて其の與ふる影響の同一又は類似に拘らず直接之に接する國民事象が呈する反應は支那國民と他國民とで決して同一ではない。例へば、支那の國土の廣大單調は支那國民に宗教的無感動や政治的不統一を造りつけてゐると考へられるが、同様に、否一層、廣大單調なアラビアの國土、

シアの國土は必ずしも同様な宗教的無感動や政治的不統一をアラビア人なりロシア人なりに造りつけては居らない。日本國土の溫和な氣候や豊富な雨量は日本人に「ものあはれ」といふヒューマンな感情を植ゑつけてゐると考へられるが、支那の國土の、特に中南支海岸地方の、同様な氣候や雨量は必ずしも支那人に「ものあはれ」を植ゑつけては居らない。かくの如く、同一又は類似の國土から來る影響に對して直接之に接する國民事象が呈する反應を支那國民が他國民と異にする事實に鑑みる時、直接支那の國土に接する支那國民事象が、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつつ、支那の國土の一方的影響を受けながらも、尙且自己決定的に、幾つかの可能な姿の中から一定の姿を自ら選擇して之を取る、といふ自律性を具有することを認めざるを得ぬ。直接國土に接する國民事象は、上に論じた支那國民事象の全體性に基つて、他の支那國民事象との相互決定的關係に於て、從つて支那國民事象全體の部分として、此の自律性を具有發揮するのである。かくて、支那國民事象が支那の國土に接する所に、吾々は直接國土に接する支那國民事象、從つて支那國民事象全體の自律性を認めざるを得ない。

二 支那國民が他國民と勢力的關係に立入れる所に支那國民事象の自律性が現れてゐる。

支那國民は其の外的社會環境に於て他國民と勢力的關係に立入り、其の對外勢力的關係に於て

諸多の對外事件といふ支那國民事象を惹起してゐる。此の對外事件の形態又は經過は相手國民の勢力によりて決定せられる所大であつて、其の形態經過は之に依りて説明せられる。然しながら、相手國民の勢力を以て之を説明し盡すことは出來ない。支那國民の對外事件は相手國民の勢力の決定を受けながらも、なほ其れによりて決定せられざる或る幅の動きを、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつゝ、自己決定的になしてゐる。即ち、支那國民の對外事件は或る程度の自律性を具有發揮してゐる。一つの他國民勢力が支那國民と第三國民とに共通に及んだ場合、其の相手國民の勢力、従つて其の與ふる影響の同一なるに拘らず、支那國民との間に起つた事件と第三國民との間に起つた事件とは形態や經過を同一にしない。即ち支那と第三國とで同一他國民勢力に對して呈する反應を異にする。例へば、蒙古の襲來は支那國民にも日本國民にも殆んど共通な運命であつたが、蒙古と支那國民との間の事件と蒙古と日本國民との間の事件とは餘りにも懸隔ある形態並に經過のものであつた。成程、陸続きなると海を隔つると、又、神風の佑けあるとなきとの自然環境の相違の演じたる役割の小ならざるを認むべきも、以てかの懸隔を説き盡し得べくもない。歐米帝國主義勢力の東漸を取つて觀ても、支那に起つた經過と日本に起つた經過とは随分異つたものであつた。かくの如く、同一の他國民勢力に對して呈する反應を異にする事實

に鑑みる時、支那國民が他國民と勢力的關係に立入りて惹起する對外事件といふ支那國民事象が、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつゝ、相手國民勢力の決定を受けながらも、尙且自己決定的に、幾つかの可能な形態經過の中から一定の形態經過を自ら選擇して之を取る、といふ自律性を具有することを認めざるを得ぬ。支那國民の對外事件は他の支那國民事象との相互決定關係に於て、従つて支那國民事象全體の部分として、此の自律性を具有發揮するのである。かくて、支那國民が他國民と勢力的關係に立入れる所に吾々は對外事件といふ支那國民事象、従つて支那國民事象全體の自律性を認めざるを得ぬ。

三 支那國民の外來文化受容の仕方に支那國民事象の自律性が現れてゐる。

支那後代の文化は單純に原始支那文化が時代と共に發展したものに過ぎぬとは考へられぬ。多分に自然環境や外的社會環境の影響を受けて發展變革したものである。支那國民は其の外的社會環境に於て、他國民と勢力的關係に立入つて、そこに對外事件を惹起してゐると共に、他國民の文化に接し、之を刺戟として固有の支那文化を發展變革せしめてゐる。支那後代の文化には外來文化の受容と受容文化とが豊かに含まれてゐる。支那國民は外來文化受容といふ國民事象の豊かなる經驗を有つてゐる。此の外來文化受容の仕方又は受容文化の姿は外來文化そのものに依りて

決定せられる所大であつて、其の仕方、姿は之によりて説明せられる。然しながら、外來文化を以て之を説明し盡すことは出来ない。支那國民の受容文化は外來文化そのものの姿を承継しながらも、なほ其れを逸脱する或る幅の動きを、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつゝ、自己決定的になしてゐる。即ち、支那國民の受容文化は或る程度の自律性を具有發揮してゐる。一つの外來文化が支那國民と他國民とを共通に刺戟した場合、其の外來文化の同一なるに拘らず、支那國民の受容の仕方と他國民の受容の仕方とは同一ではない。即ち、支那と他國とで同一外來文化に對して呈する反應を異にする。例へば、佛教は支那に入りては見らるゝが如き支那佛教となり、遂には「三教一教」の境地に陥つて了ひ、日本に入りては見らるゝが如き日本佛教となつた。キリスト教の運命も亦支那と日本とではかけ離れたものであつた。科學文明又は機械文明の採用、近代國家の形成、マルクス主義思想感受克服の仕方等の、支那國民と日本國民とに於て如何に異なることよ。かくの如く、同一外來文化受容の仕方を支那國民が他國民と異にする事實に鑑みる時、外來文化受容といふ支那國民事象が、他の支那國民事象と相互決定關係を保ちつゝ、外來文化そのものの姿を承継しながらも、尙且自己決定的に、幾つかの可能な仕方の中から一定の仕方を自ら選擇して之を取る、といふ自律性を具有することを認めざるを得ぬ。支那國民の

外來文化受容は他の支那國民事象との相互決定關係に於て、從つて支那國民事象全體の部分として、此の自律性を具有發揮するのである。かくて、支那國民の外來文化受容の仕方に吾々は當該支那國民事象、從つて支那國民事象全體の自律性を認めざるを得ぬ。

此の如くにして、支那國民が「外」からの刺戟に對して呈する反應に個々の支那國民事象の自律性が認められ、個々の支那國民事象を部分とする全體たる支那國民事象全體にも亦從つて自律性が認められる。此の自律性に對して因果的歸屬を追求し妥當的な説明を求むれば、而して、偶然とか運命とか神とかいふものの立入ることを許さない以上、言ひ換へれば科學性を拋棄しない以上、支那國民事象の基體たる支那國民に一つの自我又は主觀が存して、支那國民の此の自我が自己決定的、自主的に能いて個々の支那國民事象從つて支那國民事象全體をして自律性あらしめ、「外」からの刺戟に對して自律的に一定の反應を呈せしめるのだ、と理解するの外はない。即ち支那國民に對して自我と自我の作用性、要するに自我性を認めざるを得ない。

第二 支那國民の原始文化並に支那國民文化の時代的變革に於て支那國民事象の因果的歸屬の追求は行詰り、行詰りに立つこれ等の支那國民事象には自律性が認められる。他の何ものによりても決定せられざる其れ自身の自己決定的な動きが認められる。此の支那國民事象の自律性に對

して、妥當的な説明を求むれば、前述の「外」からの刺戟に對する反應に認められる支那國民事象の自律性と同様、之が基礎たる支那國民に自我性を認めざるを得ぬ。言ひ換へれば、支那國民に自己決定的自主的な能き即ち自我性を認めることに依つてはじめて此の支那國民事象の自律性が妥當的に理解せられること前述の場合の自律性と同様である。

一 支那國民の原始文化には自律性が認められる。支那文化は時代と共に著しき變革を閲してゐるもの、後代のものは前代へ、更に前々代へと因果的歸屬を遡つて追求することが出来る。例へば、清代儒學は明代儒學から出て來て居り、明代儒學は宋代儒學から出て來てゐるといふ様に。又宋代文化は唐代文化を受け、唐代文化は六朝文化、漢代文化を受けてゐるといふ様に。此の遡求は窮極支那國民の原始文化所謂支那文化の源流にまで及ぶことが出来、原始文化に遡及するまでは大體に於て行詰ることがない。即ち、支那後代の文化はすべて支那原始文化が時代と共に、自然環境や内的並に外的社會環境の影響を受けて、發展變革し來りたるものに過ぎぬと考へられ、其れに對して其れ自身の自己決定的な動き即ち自律性を一應認めざることを得る。然るに、原始文化に至つて因果的歸屬の遡求ははたと行詰る。原始文化に對しては其の原因なり原型なりを他に求むべき由がない。即ち、支那の原始文化は諸多の可能なる構造の中から一定の構造

を自ら選擇して之を取る、といふ自律性を生れながらにして具有し、自然環境や社會環境の影響を受けながらも、なほ他の何ものによりても決定せられざる其れ自身の自己決定的な發足をなしたるものと認めざるを得ぬ。

二 支那國民文化の時代的變革には到る處自律性が認められる。支那後代の文化はすべて支那原始文化が時代と共に、自然環境や内的並に外的社會環境の影響を受けて、發展變革し來りたるものに過ぎぬと考へられ、因果的歸屬は行詰ることなく、支那國民文化の時代的變革に對して自律性を取へて認めざることを得るのも一應のことに止る。支那文化の時代的變革の一齣一齣を凝視するに、其れに先入する文化、原始文化にまで遡る所の前代文化、並に自然的社會的環境から其の變革の必然性は出て來ない。到る處因果的歸屬の追求は行詰る。例へば、清代考證學としての儒學の隆興は、前代前々代の儒學の動向と、康熙乾隆の朝の作爲と、顧炎武等の實證主義的學者個人の出生とから一應は説明がつくであらうけれども、それ丈で説明し盡すことは出来ない。考證學より他の傾向のものでもあり得た筈であつて、右の豫件から清代儒學が考證學でなければならなかつた必然性は出て來ない。右の豫件の影響を受けながら儒學が清代に入りて自己決定的に考證學に向つて行つたのだと考へざるを得ない。即ち、支那文化の時代的變革は、諸多の可能

なる進路の中から一定の進路を自ら選擇して之を取る、といふ自律性を具有し、自然環境や內的並に外的社會環境の影響を受けながらも、なほ他の何ものによりても決定せられざる其れ自身の自己決定的な足取りをなしたるものと認めざるを得ぬ。

支那國民文化の時代的變革の一齣一齣に自律性が認められるならば、其の集積たる支那歴史の動向にも亦従つて自律性が認められなければならない。若し夫、支那歴史を以てヘーゲルが「いみじくも斷じたるが如く「無歴史的歴史」なりとせむに⁵⁾、それは支那歴史が自らに於て「無歴史的歴史」の道を諸多の可能な道の中から選び進んだのだと解すべきである。唐宋の交に支那が近代に入つたといふ支那歴史の大きなうねりについても亦同様である。

5) „eine ungeschichtliche Geschichte.“ „diese Geschichte ist selbst noch überwiegend geschichtlos.“ Hegel's Werke 9, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, 1840, S. 130—131.

此の如くにして、支那國民の原始文化並に支那國民文化の時代的變革に自律性が認められ、従つて支那國民文化の時代的變革の集積たる支那歴史の動向にも亦自律性が認められる。此の自律性に對して因果的歸屬を追求し、妥當的な説明を求むれば、而して偶然とか運命とか神とかいふものの介在を認めない以上、言ひ換へれば、科學性を抛棄しない以上、支那國民事象の基體たる

支那國民に一つの自我又は主觀が存して、支那國民の此の自我が自己決定的、自主的に能いて、原始文化に自律性あらしめて以て一定の構造を選び取らしめ、文化の時代的變革に自律性あらしめて以て一定の進路を選び取らしめ、歴史の動向に自律性あらしめて以て一定の道を選び歩ましめたのだ、と理解するの外はない。即ち、支那國民に對して自我と自我の作用性、要するに自我性を認めざるを得ない。

畢竟、支那國民に自我性儼として存し、吾々が支那國民事象の凝視を續け行く時、「外」からの刺戟に對して支那國民が呈する反應、因果的歸屬の行詰る支那國民の原始文化並に支那國民文化の時代的變革、其の集積たる支那歴史の動向に於て其れが現はす所の自律性に露呈して、吾々の眼に映じ來る。之を拂拭しようとしても拂拭し得べくもない。

四 支那國民性の實體性

上に論じたるが如く、支那國民事象には全體性を認めざるを得ず、其の基體たる支那國民には自我性を認めざるを得ぬ。歸するところ、支那國民と支那國民を基體とする一切の歴史的社會的事象とに自我に依る統一性を認めざるを得ぬ。エドゥアルド・シュブランガー等の所謂精神科學

的心理學は個人に就いて性格又は精神構造といふ概念を打ち樹ててゐるが、其れは、個人と其の行爲又は生活とに上述と同じ全體性と自我性と、要するに、自我に依る統一性の認められるところから、此の個人に考へられる精神作用の統一的法則性の總體に對してかゝる概念を打ち樹てたるに外ならぬ。⁶⁾ 支那國民と支那國民事象とに全體性と自我性と、要するに、自我に依る統一性の認めらるゝ以上、支那國民に精神作用の統一的法則性を考へることが出來、而して其の總體に對して性格又は精神構造といふ概念を打ち樹てることが出來る。こは支那國民なる一つの國民の性格乃至精神構造なるが故に、支那國民性又は支那國民精神構造といふことが出來る。

6) E. Spranger, Lebensformen, geisteswissenschaftliche Psychologie der Persönlichkeit.

北孝三郎同書全譯『文化哲學概論「生の形式」三一四。

精神科學的心理學の教ふる所に從へば、個人性格又は個人精神構造は精神科學的心理學の豫想すべき必須の實體概念 (Substanzbegriff) である。個人性格又は個人精神構造は其の自我又は主觀に對して妥當的と考へられる法則性の總體といふ意味で一つの實體であり、彼の行爲又は生活を統一的に理解せんがために豫想すべき必須の概念である。實體であるといつても勿論物質的實體 (materielle Substanz) ではなく、「現象の背後に存するものとして吾人が先驗的に考へる所の常住

的原質」の意義の實體、即ち「ものそれ自體」でもない。いはゞ、客觀的統一體ではなくして一個の主觀的構成物に過ぎない。必須の概念であるといふのは「かゝる實體概念なくしては精神科學は成り立たない」といふ意味で必須の概念である。かうした實體概念として個人性格又は精神構造を自我に對して適用することは自然科學的心理學の許容しない所であるけれども、精神科學的心理學にとりては個人性格又は個人精神構造は必須の實體概念である。

同様に、支那國民性又は支那國民精神構造は精神科學の支那研究の豫想すべき必須の實體概念である。即ち支那國民性又は支那國民精神構造は支那國民に認めらるべき自我又は主觀に對して妥當的と考へられる法則性の總體といふ意味で一つの實體であり、支那國民を基體とする歴史的社會的事象を統一的に理解せんがために豫想すべき必須の概念である。而して、實體であるといつても勿論物質的實體ではなく、支那國民事象全體の背後に存するものとして吾々が先驗的に考へる所の常住的原質といった様なもの、即ち「ものそれ自體」といつた様な實體でもない。言つて見れば、支那國民が具有する客觀的統一體ではなくして支那國民に認めることの出來る主觀的構成物に過ぎない。必須の概念であるといふのは、かゝる實體概念なくしては精神科學的支那研究は成り立たない、といふ意味で、言ひ換へれば、支那國民事象を統一的に理解せんとする上

二 事變の發端に現れたる支那人の世界観

支那事變の發端には次の如く支那人の世界観と而して其れを根柢とする支那人の性格が現れてゐる。

第一 支那人は本來民族的結合の素地を有するところに加へて近時熾烈なる民族意識を懷くに至つたが、其の民族意識も激情的であり、従つて民族運動も内部建設に向ふよりも對外反撥に向ひがちである。依つて、「陰に陽に手邊だらけのうちに戦を始めた」と周佛海氏が言つてゐる様に、準備整はぬまゝに民族主義者は同床異夢の共産黨と共に族人を驅り立てて對日戦争に趨つて了つたものと思はれる。

第二 支那人は自分自身では自信力を生み出し得ない^{くせに}、他から自信を興へられると實力以上に極端に自信力を増大する性を有する。其の性故に、時代思潮と列國の對支媚態に依つて自信力を興へられるや、己が實力を無視して自信力を増大し對外反撥に熱し來り、抗日侮日に狂ひ、重なり重なつて遂に事變の原因を醸成した様に思はれる。同じ性から如何に前上海事變で支那軍が抗戦力を示し、綏遠事變で蒙古兵を打破つたとしても、日本軍に對して勝利を博するであ

らうといふ合理的な見透しは到底出て來る筈はないのに拘らず、支那の若い將校、青年、學生、一部大衆はこれ等によつて自信力を興へられ、過分に自信を増大し、對日勝利の自信を漲らし、遂に戦争に趨つたのであつた。

第三 支那人は彼に迫り來る相手が強力であつて、而も「性格的」でなく信義を行はずと見える時には其の相手に對する憎惡に熱中してヒステリー症状を起し捨鉢となる。「鳩を飲んで喝を止める」ことを辭せないし、「砒霜を吃つて老虎を死す」ことを敢へてする。であるから、昭和十一年日支折衝當時共産黨が支那國內最大の惱みであつたに拘らず、流石に事態の不明朗に堪へず對日憎惡に熱中して了つて、日本の防共協定申出に肯ぜず、「日本と妥協せんよりは寧ろ赤露の餌食とならん」とのヒステリー症状を起したものと解せられる。又、かの日支折衝がもの分れとなつた節、未だ必ずしも支那側が對日戦争に趨らなければならぬ何等合理的必然性はなかつたのであるが、日本の「性格性」に見當つきかねたるものゝ如く、「いつぞ戦争をやつて了はうか」といふやぶれがぶれになつたと觀られる節がある。汪精衛氏も嘗つて此の間の機微を語つて「侵略主義も共産主義も固より恐しいには違ひないが、日本が中國を滅すつもりならば尙更恐しい。さうなればいつそのこと侵略主義・共産主義の國家と結んで日本に反抗した方が、たとひ鳩糞を飲

んで渴きを止めるものとは分つてゐても、まだましである」と述べてゐる。

第四 支那人は部分的には合理性に富み合理的打算に長けてゐるけれども、動もすれば合理的打算に行き過ぎ、却つて非合理に墮し、木片で菟めて丸太で流す様な結果を招き、結果を大局から観ればヒステリー發作の所業に等しい様な行動をなす。上述の如く、「日本と妥協せんよりは寧ろ赤露の餌食とならん」とて、日本の防共協定申出に肯じなかつたのには、右の傾向に基づいて以夷制夷の合理的打算に行き過ぎ、却つて非合理に墮した一面が認められる。對日戦争に趨るに當り蒋介石を繞る人々は流石に對日勝利の自信を有たなかつた。當時の消息を周佛海氏は語つてゐる。「朝野上下の論調は曇を衝くの氣概があつたが、しかし左様に高調子の人々も、頭腦の單純なお目出度い人を除いては誰一人として、支那が戦争を繼續すれば間違つても勝つ見込はないといふことを悟らないものはなかつた……蒋介石氏は勿論、何人にもまして、ハッキリと知つてゐた筈である」と。それに拘らず彼等が對日戦争といふ無暴に趨つたのは、蔣政權の對國內政策上不可避だつたのだらうが、其の限りで彼等は、矢張右の傾向から、自己政權の維持伸張のためといふ合理性に行き過ぎて、對日戦争といふ非合理に墮したるに外ならぬ。事變の發端に於て、夙に「最後の勝利」といふ考へ方があつたのであるが、此の「最後の勝利」の見透しの合理的でない

ことは聯蘇抗日派を除き支那の指導層にとつて明白であつて、到底確信とはなり得ない筈であるけれども、假に眞底「最後の勝利」の確信を以て對日戦争を決意したものとすれば、これ亦、上述の傾向から、對日勝利の爲といふ合理性に行き過ぎて非合理に墮したものと認めざるを得ぬ。蓋し、對日長期抗戰の爲に焦土戰術、ゲリラ戰術を行ふことに依つて支那が失ふべき所と「最後の勝利」實は日・支兩虎共に倒るゝことに依つて支那が得るかも知れない所とを合理的に商量すれば、失ふべき所の遙かに大なるは火を賭るよりも柄かな所である。

第五 支那人は部分的合理性に行き過ぎて却つて非合理性に墮し、從つて矛盾に陥り、次第に深い矛盾に落込み、而も克く其の矛盾に堪へる喜劇的な人物である。周佛海氏も述べてゐる様に、蒋介石は對日勝利の見込なきことを何人にもましてよく知つてゐて、腹の底では對日全面戦争をしかけ度くは思つてゐなかつたのであるが、反對勢力を壓服せんが爲に心にもなく對日戦争を高調し、「相手の調子より更に調子を高めることによつて反對派を壓服しようといふ肚」から、「彼等の調子が高くなればなる程蔣氏の調子も一層高くなり」遂にのつびきならなくなつて、腹の底とは違つた方向に趨るの餘儀なきに至つたものゝ如くである。かゝる苦肉の策は支那人のえてなす所であるが、此の苦肉の策に出て自繩自縛的に對日戦争に趨つた「聰明絶倫」な蒋介石の

やり方は、正しく合理性に行き過ぎて非合理性に墮し、矛盾に陥り、而も次第に深い矛盾に落込んで行つて恬然たるものに外ならぬ。

第六 支那人は一個の無感動合理主義者であつて英雄的狂酔の要素を缺く。支那人から眞の英雄は生れ難い。蔣介石は「民族英雄」を僭稱するも創造的精神に燃え立つ眞個の英雄ではない。右の如く、寧ろ策倒れの喜劇役者であらうか。汪精衛氏も蔣介石を評して言つてゐる。「彼は常に二面作戦を用意してゐる機會主義者であつて……自己の責任において自分から新しい途を切り拓いて前進するといふ性格ではないのである」と。支那ではかゝる性格が英雄であるのだといふならば、彼を「民族英雄」と稱するも不可はない。

二 事變の經過に現れたる支那人の世界観

事變の經過には次の如く支那人の世界観と性格とが現れてゐる。

第一 支那人の熾烈なる激情的民族意識は持續して事變の經過にも現れ、やぶれかぶれにせよ重慶側支那軍は頑強に抗戦を續けてゐる。

第二 依然として、自信力なきくせに他から自信を興へられると極端に自信力を増大する性が

ら、若し一小局面に於て若干の優勢を示す様なことがあれば、よし虚報であつても、民衆歡呼し士氣亦大いに揚る。動もすれば四月攻勢、冬季攻勢などといふ。

第三 迫り来る相手如何では憎悪に熱中してヒステリー症状を起し捨鉢になる性から、いよいよやぶれかぶれになつて抗戦を續け、敗退に次ぐに敗退を以てし、徒らに國土を荒廢に歸せしめ、民生を失ひ、日本側をして奔命に疲れしめ結局敗退せしめんとて失地の赤化さへ進んで策し「國亡びて赤色ゲリラ残る」も辭せない。又、汪氏も指摘してゐる様に「共產黨及び其の走狗たる者以外の人々にして和平を希望しない者は一人も居ない」のであるが、それでゐて、重慶側は日支兩國は共存出来ぬものと認定して、「汝と偕に亡びん」ことを政略軍略の一切の出發點としてゐる。重慶側が和平を論議する條件として高踏的に日本軍の撤兵を要求するのも明かに此のヒステリーの現れである。汪派の人と雖も亦獨特の深奥な世界観を藏してゐないわけではなく、汪氏自身に前述の如く「いつそのこと侵略主義・共產主義の國家と結んで日本に反抗した方が、たとひ鴆毒を飲んで渴きを止めるものと分つてゐても云々」の詞があり、周佛海氏も亦「もしも日本が眞に外交的方式及び平和條約を以て支那の獨立と生存とを妨礙しようと思つてゐるものであるならば……私達の主張も當然徹底的抗戦でなければならぬ。何となれば、戦ふも亡び、和するも亦

亡ぶのであるから、和して屈服して亡びる位ならばいつそのこと戦つて悲壯な亡び方をした方がましであり、その方が歴史上に於ても人に讃められ、涙を注がれるだけの痕跡を止めることになる」と稱する。

第四 支那事變は「戦争以上の戦争」として戦ひつゞけられてゐる。日本側が望みたるに拘らず、一度たりとも軍使の有効なる送迎もなく、一局面の停戦協定も成立せず、城下の盟ひもなされず、城市の開け渡しも行はれずして、ドス黒く戦は續いてゐる。いはゞ、「徹底戦」を蔣介石側は戦つてゐる。かくる「徹底戦」は支那人の如き虚無主義者でなければ出来ることではない。虚無主義者である支那人が對日憎惡に熱中してヒステリーを起してゐるのだと観る時最もよく此の「徹底戦」は理解せられる。

第五 眞虚無主義者である支那人のこと故に又、一方に於てかうした「徹底戦」を戦ひながら、他方に於て機會主義者の大群を繰り出して和平的姿態を取らしめ、事變面を賑かにしてゐる。

第六 部分的には合理性に富み合理的打算に長けてゐるけれども、動もすれば合理性に行き過ぎて非合理に墮し、打算に過ぎて却つて損失を招く前述の性から、以夷制夷の外交定跡に行き過ぎて、日本側が當初事變不擴大方針を持したるに對して支那側は之を擴大に導き、日本軍を上海、

中支に招いたのであつた。更に同じ定跡を進めて、對日勝利の爲に同じく夷である英・米・佛・蘇聯を味方に引入れて、かくる第三國の援蔣行爲に俟つて抗戦力を持續し來つた。此の第三國の援蔣は夫々自國の利己に發するものであつて、眞に本腰のものでないことは明白である。第三國をして援蔣に本腰を入れさせるにはわが身をかれ等に委ねなければならない。此の由々しき事を蔣側は敢へてした。即ち英・佛勢力を西南ルートから迎へ、蘇聯勢力を西北ルートから誘ひ、更に内部に於て共產黨をのさばらし、共產軍及び赤色ゲリラの跳梁を甘受してゐる。一の夷と戦ふため更に恐るべき他の夷を數多身内に引入れた。民族存立の爲の戦争といふ建前から言つてこれに勝る曲事はないであらう。周佛海氏は賢明に「國際狀勢の變化の中に支那の最後の勝利を見出さうとすることは空中樓閣でなくて何であらう」と言つてゐる。此の曲事は全く以夷制夷の合理性に行き過ぎ、夷に制せられるの非合理に墮したるものに外ならぬ。抗戦を續けて「國亡びて赤色ゲリラ殘る」も辭せざる長期抗戦態度も亦一面に於て此の合理性の行き過ぎによる非合理であり、ヒステリー發作である。重慶蔣介石派が衷心和平を希望しながら敢へて和平を主張しない原因が、華年氏のいふ様に、第一、共產黨に乗せられて政權を奪はれることを恐れ、第二、共產軍が増大してゐること故、前線に重大な紛争の起ることを恐れ、第三、蔣介石個人が「漢奸」と罵

られ、政治的権力を喪失し、汪氏の後塵を拜することになつて「面子」を失ふことになる、が故であると認めるならば、事變發端に於ける場合と相違らず、自己政權の維持の爲といふ合理性に行き過ぎていひ、非合理に墮せるを示すものである。

第七 部分的な合理性に行き過ぎて非合理に墮し、矛盾に陥つて、いよく矛盾の深みに沈淪し、而も存外平氣で居る性から、武漢陥落直後の重慶で「唯一人講和を思はないものはなく、而も誰一人敢へて講和を言ふものがなかつた。皆の者は……どうか他人が講和を主張してくれれば、そして自分は主戦論のまゝで居りたい。換言すれば、誰も皆、他人が漢奸になり、自分は民族の英雄になることを望んでゐた」と周佛海氏がいふ様な悲しむべき矛盾現象が起り、奥地のみならず上海租界にさへそれが瀰漫した。

第八 支那人は性極めて尊大である。而も無内容に空虚に尊大で、真底からへこまざれるといふことがない。少しでも得意になれることがあれば大いに得意になり、而も矛盾に堪へる樂天家である所から、朝に一城夕に一壘を抜かれ、要衝を次から次と失つて敗退しつゝ、一般に敗戦感を懐くに至つて居らない。敗戦にも善戦のなくさめを持ち、どんな目に遭つても情氣ることなく、樂しさうに敗けてゐる様に見える。聯蘇抗日派にとっては敗戦は豫定の段階であるから別として、

一般のかゝる「樂敗」は支那人でなければ出来ないことである。又、其の樂天家であるところから、とかく日本の國力を過少視し、今にも日本國論が分裂する様に思ひ、無根據な第三國人の日的崩壊を信じたがつて已まない。性尊大なるの故に、凡そ人に相手にされることをいたく悦び、「面子」を重んじ、相手にされないことを最も憤り容易にヒステリー症状を呈するところから、昭和十三年一月六日、日本の發した蔣政權を相手にせずとの聲明は蔣側にとつて何れの殲滅戰如に徹底して來た。尊大にして信認せられることを欲し民族の自主獨立を求める心飽くまで強きが故に、汪精衛派でさへ、重慶側に去つた陶希聖と共に日本は支那を滅すこと不可能なりと確言し、汪氏自身「日本は中國の主權を尊重するのみならず、尙ほ進んで獨立自主國家としての必須條件の完成のため中國を援助せんとするものである」べきを高調して日本との對等平等を求めて已まず、周佛海氏は事變解決の政治的手段は「支那人をして、日本は支那を滅さうとするものでなく、支那の獨立と自由とを尊重するといふ前提の下に日支の合作を實行せんとするものであることを了解させることである」といひ、陳公博氏は「支那の要求する所は獨立自由と統一と直ち

に實現する事實と日本が支那を信用することである」と叫び、嚴軍光氏は近衛聲明の三原則を以て、「(一)共同防共、(二)善隣友好、(三)平等の立場における日支の經濟合作」なりと理解し、遂には「日本がその大陸政策と民族發展の完成を欲するならば、必ず絶対平等の立場において支那と相接し、政治、軍事、經濟、文化の諸部面に亘り全力を擧げて支那を援助しなければならない。……日本は支那民族の侮るべからざる精神を明かに認識し……支那民族と充分親密に提携し、絶對的に相互尊重の平等的原則に立脚して、アジア解放のために共同努力する必要があることを悟つた」と稱する。同じ派の華年氏は、日本が誠意を固く守らず、汪政權との和平交渉に成功せねば日本の失策であり末路であるが、支那としては和平運動の幾人かの同志を犠牲にすることのほか、毫も損失はないと稱してゐる。こゝに至つて自尊と自信極まれりと謂ふの外はない。支那人が其の尊大性を以て人格を認められ相手にされ、相應(否、相應以上)の地位を興へられ、自主獨立に動ける領域を興へられ、其の自由領域に就いては彼を信認して事を委されんことを欲するの切なるものあり、汪精衛派の日支經濟合作に關する意向にもそれがいやといふ程よく現れてゐる。「英米の經濟侵略はなほ支那に多少の息抜きを残してくれてゐるが、最近一年來に現れた日支の經濟合作なるものを數十年來の英米の經濟侵略に比べてみると更に遙かにひどいもので、

單に肉を食ひ盡すばかりでなく、毛でも骨でも皆スツカラカンに食つてしまひ、支那をして生存の餘地なからしめるに近い」と周佛海氏は言ひ、梅思平氏は、日本と支那とは支那の資源に日本の技術及び資本を當てがふ「長短相補、有無相通」の經濟提携をしなければならないやうに出來てゐることを認めつゝ、「各自經濟上において獨立自主し得るものでなくてはならぬ。換言すれば、いづれの國家も必ずそれ自體を以て、一個の獨立的經濟單位を構成することが必要であつて、かくしてこそ始めて……經濟上の合作或は提携をなし得るのである。」いはゆる經濟提携なるものは、二つの互に平等の基礎の上に立つ獨立の經濟單位が、相互に手を携へて互惠的利益を謀らんとするものであつて、決して一方が他方に抱かれて其の附屬部分となり、獨立の個性を失ふといつたやうなものではない筈である。日支經濟提携は經濟懷抱であつてはならない」と言つてゐる。

第九 支那人に其の社會に就いての考へ方に於て、よほどの高い「性格性」を持たない限り、民族乃至國家に對して「性格性」を認めず、誠意あるものと認めず、信義を行ひ得るものと思はないところから、日本側が時に必ずしも高い「性格性」を示さなかつたのに乘じて、汪派の外はをいへば日本の「性格性」を認めず信義を認めない。即ち、蔣介石は「よしんば日本と直接講和せんとしても話し合ふ對手が多く、眞の單一的對手を發見することが出來ない」と嘯いたと傳

へられる。

第十 支那人は相手の合理的打算を看破する力鋭きに過ぎて猜疑心に富む。且又、迫り来る相手が強力であつて而も信義を行はずと見える時には、其の相手に對する憎惡に熱中すると共に猜疑を逞しうして相手の胸中に利己のみを讀むから、日本側の努力に拘らず宣撫工作は捗々しからず、汪氏もいふが如く、重慶側は「日本も亦一個の侵略主義者であり、殊に中國に對しては侵略が最も易しく、また最も甚しいものであつて、『暴を以て暴に易ふる』どころでなく、實に暴中の暴であるといふ……かういつた見解を持つてゐるために『東亞協同體』や『東亞秩序の建設』に對しては直ちにこれを中國滅亡の代名詞であるとする」。又、周佛海氏のいふが如く、「和平條件は支那をして獨立を失はしめ、支那をして生存し能はぬ様にするものではなからうか」との疑問を持ち、「日本には信義がないから、もし（保障なしに）直接交渉すればきつと馬鹿を見るにきまつてゐる」と疑ひ、日本の誠意を問題として、「日本の言ふことはなか／＼話がうまく、日本の聲明も實に立派なものである。しかし、實際に行つてゐる事は全くさうでない。口を開けば平等互惠の經濟合作を言ふが、事實上是完全に壟斷となつて現れる。……支那をして生存の餘地なからしめるに近い」といつて、和平主張に反對し抗戰を繼續してゐる。猜疑の心故に眞の愛情を

愛情として受取り誠意を誠意として理解し難く、民族乃至國家を以て完全に利己的にのみ動くものと認めるところから、汪精衛氏派の外は斷して大臣細亞主義に興味を持ち得ない。汪氏自身さへ、「中國人の身になつてみれば、今や其の國の亡びんことを憂へて眼のない際に、更に東亞のことまで憂へ得るであらうか」と反問してゐる。

第十一 支那人は生命人かと思えて生命人に非ず、經濟人かと思えて經濟人でもない。生命人の如く見えて實は生命も時に鴻毛の輕きにおく支那人の性が、和平救國の爲に眞に生命を賭してゐる汪派の人々に認められる。經濟人の如く見えて、決して喰はずに利を以てすれば則ち跟いて來る様な人間で支那人がないこと、安居樂業を悦ぶが、安居樂業にもまして求むるもの、あることは宣撫工作の奏效程度にも觀取せられる。

第十二 支那人は生命人・經濟人であるよりもむしろ社會人である。支那人は巧緻なる社會技術に長じ、而も利益的社會技術に老熟して居り、従つて貨幣經濟生活に練達せるが故に、抗戰中、就中最も巧妙を極め支那側がなにがしか成果を収めたのは武力戦よりも矢張謀略であり、經濟戦であり、特に通貨戦である。「匯割制度」にせよ、外國爲替管理辦法にせよ、地方金融機構改善辦法にせよ、法幣平衡資金の設置にせよ、在支外國金融資本家の入れ知恵もあり實質的助力も

興つてゐたには違ひないが、武力戦のみすぼらしさに比ぶれば誠に鮮やかなものであつた。

四 南京陣營の歸趨

支那側南京と重慶と兩つの陣營の事變觀乃至對事變態度は上述の如きものである。和平と抗戦とに對立して兩者水炭相容れず、南京の「和平救國」はむしろ日本の「東亞新秩序建設」と二にして一であり、既に二にして一となつて久しい。然しながらそれは一半面のことであつて、他の半面に於ては、重慶の「抗戦建國」と、南京の「和平救國」とこそが二にして一となり、重慶と日本とは水と油の如く相容れないこと固よりであるが、南京と日本とも亦強く相反撥して折角一となつたものが分れて二となる素地を有しないではない。後の半面、即ち南京をむしろ重慶に結びつけ、日本と相反撥せしめることあるべき素地は、歸するところ支那人の心組織の核をなせる尊大性と民族意識とである。日本がこれに對處して日本と南京との反撥を排除し、圓滿妥結を見たる日支國交調整を實質的に仕上げ、以て大東亞新秩序建設に向つて中核的小圈を仕上げる道は、一に我が日本自身の力を愈々強大にし「性格性」を彌が上にも昂揚するにあると思はれる。南京陣營の歸趨を安閑として見送つてはならない。

第三章 大陸に於ける「徹底戦」

一 大東亞戦争右翼の驚異

今世界に於て戦はれつゝある戦争に就いて近代戦といふことが言はれてゐるが、それと並んで科學戦といふことがしばしば言はれてゐる。かと思ふと、思想戦、神經戦といふことも言はれて居り、更に全民戦、全體戦、總力戦といふことも言はれて居る。別に、消耗戦、焦土戦術といふことが言はれて居り、語源は古いがゲリラ戦術といふことも春りに言はれてゐる。科學戦以下は概ね近代戦の諸様相である様でもあり、又、科學戦が近代戦と同義語であつて、他は科學戦と相並ぶ概念かの様でもある。之が検討は其の適の人に委して、筆者は右の外に全く別個の戦争類型が今世界の或る處に於て戦はれつゝあることを指摘したい。それはわが大東亞戦争の右翼として支那大陸に於て正に五箇年戦はれ來つてゐる所の「徹底戦」に外ならぬ。支那事變より大東亞戦争にかけて支那大陸に於て皇軍と蔣軍及び共產軍との間に「徹底戦」といふ戦争類型が戦はれ來